

【 翻 訳 】

鉄凝散文 (1)

池 澤 實 芳

『女の白夜』⁽¹⁾ まえがき

『女の白夜』は、私の文集の第5巻で、散文随筆巻です。その中の大部分の作品は90年代に書いたものです。読者の便をはかって、次のように、収録作品を5部立てにしました。

第1部は、私の散文の「代表作」を集中的に収めました。「草の指輪」「河の女」の2篇は、中央テレビ局が「LTV」(文学テレビ)の形式で再創作して放映しました。私は、改編された「草の指輪」「河の女」を気に入っていません。それらの作品が画面として観衆の目の前に現われた時、なぜか私にはとても貧弱で浅薄に——製品の説明書のように——見えました。このことは、私たちの脚色・演出や撮影が「LTV」を創造する能力に欠けていた、と断言せざるをえません。たとえ、この時のスタッフが大規模なテレビドキュメンタリーを制作できた経験があったとしても、彼らの思考が「LTV」の可能性とは遥かに遠く隔たっていたのです。このことについて、私は私の尊敬する作家・余秋雨先生と討論したことがあります。なお、この現象の別の面から読書の魅力に思い至りました。人生の中のいくつかの風景はおそらく行間の中に光り輝くのに適していると確信しました。

第2部の大部分は字数の少ない短篇の随筆で、その多くは創作に関するものです。私がとくに自分のいくつかの小説集や散文集の自序を、ここに組み入れましたのは、それらの自序に私の文学観が述べられているのと同時に、多寡の違いはありますが、私の生活観も吐露されているからです。

第3部は、「人物コラム」のようなものです。ここに記録されているのは、私が接触したことがある人の印象です。これらの人たちの中には、文学の先輩や私の身内や同僚や友人や、市長、俳優およびただ一度だけしか会ったことがない読者がいます。他の人の印象記を書く場合に、私は一貫して慎重な態度を持ちつづけています。人を真に理解するのは困難なことだと、私は思います。短文1篇で人を結論づけるのは、さらに滑稽です。とはいえ、私はやはり他の人の印象を書きます。私の最大の収穫は、このような創作の中で彼らの精神上的のそれぞれに異なる美点を観賞し摂取する機会がもてたということです。

第4部には、外国体験を選びました。そのうち主要な文章は、10年の間に2度アメリカへ行ったことです。もし読者がそれらを対比してお読みくださるなら、それらを書いた時のそれぞれに異なった観点を見いだすことは難しくないでしょう。前者は、あたかも大きな目で珍しい物を見る観光客に似ています。一方、後者は、できるだけ素朴な比較の視線で、平凡人の平凡なことがらを通して、別の土地の公民と私たちとの多くの共通点と相違点とを述べたものです。

第5部の3篇の文章は、ひとしく私自身と直接関係するもので、そのうち比較的長文の「真実の

作爲的歲月」は、1975年から79年まで、知識青年として冀中平原で過ごした私の4年間の農村生活を描写したものです。この作品は、私の生活全体の中の一断片にすぎませんが、私はこの断片を重視していますし、この作品を書いた時の私の誠実さ率直さも重視しています。その村は私が家庭とキャンパスから社会へ踏み出した最初の逗留地でした。私が読者に伝えたいことは、私や私の多くの同年齢者たちがあのような歳月の中で成長したことです。私たちには真心と、熱望と、致命的な先天の虚弱体質——この虚弱体質は多くの領域に現われている——とがありました。以来、職業作家となった後に、なぜときどき心の奥底から不安が生じるのかを、私は知っています。

私は純粋な意味での散文家ではありませんが、これまで散文を粗略に扱ってきたことはありませんでした。散文という領域において、あるいは私は行儀を知らない粗忽者のような存在でしょうか。私はこれまで著名人の散文についての発言をあまり注目してきませんでした。しかし私は、散文の虚構〔制作〕を拒否する点がある意味において小説よりも高位にあるし、また流行に押しつぶされない魅力を散文はこれまでずっと有してきたとも思っています。散文の本質にも自ずから散文の矜持があります。つまり、散文は「虚構」を軽視すること、さらには「急場しのぎ〔急就〕」を必要としないことです。散文はもともと人生行路の中で「市へ行く」ことではありません。私にとって散文は、心と精神の終生の修練です。

散文はいったい何が原因で生まれたのでしょうか。私の考えでは、世の中のすべての散文はもともと人類が生存する際の相互の気配りの情から生まれたのではないかと思うのです。なぜなら気配りは人類の最もすばらしい心情だからです。人類の生存には互いの気配りを必要とします。最も高尚な文学も最も凡俗な人類の感情の潤いを欠かすことができないのです。『女の白夜』の中の、何篇かの作品で、人から気配りを戴いたり、また人を思いやったりする幸福感を吐露しています。このような幸福が心の満腔の激情を醸し出していますし、だからこそ日々の彩りは生まれるのです。

長い河にも似た生命の中で、もしも気配りが失われてしまったなら、散文も消滅してしまうのではないのでしょうか。

1996年正月

訳注

- (1) 『女の白夜』〔女人的白夜〕：『女人的白夜』は鉄凝文集・第5巻（90篇収録）として、1996年9月、江蘇文芸出版社から出版された。なお、同名の散文集（31篇収録）が1992年1月、上海文芸出版社から出版された。92年版の『女人的白夜』収録作品のうち、「我有過一只小蟹」「三次見到您」「山野的呼喚」「我愛，我想」「渴望勇敢」「若有四季便有歌」「給馬秀華的一封信」「開拓我們的心靈」「喚醒您的寶藏」の9篇は96年版には収録されていない。

横丁の心象

少女の頃、両親が遠い五・七幹部学校へ労働に行ってしまったため、外祖母の家に引き取られた私は、数年間北京の横丁の子供になった。

外祖母の家のある横丁は北京の西城に位置していた。横丁は長くなく、くの字型の袋小路が何ヵ所あった。外祖母の四合院は北側の南向きで中庭が二つあった。敷地は広くはなかったが、屋敷の門の構造は、四合院の基準に適っており、ほぼ家屋式門のなかの中型如意門に属していた。門の框の上部に「福」「寿」の文字を彫った門簪、門扉に吊るしてノッカーの用途とした黄銅の門鉞（ドア・ノッカー）、及び、迎門の黒レンガの目隠し塀と正門の両側のそれぞれにある石の「抱鼓」など、すべて揃っていた。あるいは、重厚な黒塗り門扉には、「総集福蔭、備致嘉祥」（総て福蔭を集め、備に嘉祥を致す）の類いの対聯がまだ彫り刻んであった。しかし、仮住まいの身としての私がこの黒塗りの正門を入った時には、門扉の対聯はすでに赤い紙に黒字で「四海翻騰雲水怒、五洲震盪風雷激」（四海翻騰し雲水怒り、五洲震盪し風雷激し）に換えられていた。

このような対聯は、当時の横丁のために激動の雰囲気の花を添えていた。しかし、かつては、私がおもった頃にお客さんとして外祖母の家に来た時は、横丁はゆったり落ち着いていた。その頃はすべての屋敷の門は閉まっていて、人々は自分たちの屋敷内で、自分たちの木の下で自分たちの暮らしをしていた。外祖母の中庭には4本の大木があった。そのうち2本は背の低い丁香[リラ]で、2本は背の高い棗の木だった。五月には、丁香が庭いっばいに雪のように白い香りを放っていた。秋になると、静かな昼、重たい棗の実が黒レンガの地面に落ちて跳ねあがる音が、いつも私の耳に聞こえてきた。とたんに私は、地面に落ちた大棗を探そうと、飛ぶ矢のような速さで部屋から飛び出していった。

たまたま、屋敷の門が開くことがあるが、その大半はその家の女主人が食料品を買いに出かけた後戻ってきたりした時である。彼女たちは小さな経木に包んだ少量のひき肉や、新聞紙に巻いた蕪の小さな束を掌に載せていた。そこで、横丁は謙虚で穏やかななかにも情熱的な、くどいがてきばきさも混じった対話がはじまる。彼女たちをくどいというのは、その会話の中にいつでも「足元にお気をつけて」とか「お暇ならいらっしやいな」とか「いまだにおぼえてくださったんですね」とか「まあ、あなたったら……」とかとかという言葉を送りもせず混ざるからである。外祖母の壁隣の屋敷に住んでいた満州旗人のおばさんの話しぶりは、儀礼的言葉がさらに多かった。彼女たちがてきばきしているといったのは、彼女たちの会話の中で言葉の省略を得意としたからである。たとえば、次のように。

「春生に雪里蕪が来ましたよ」

「筆管児に猫魚がありますよ」

「春生」とは、横丁北口の春生食料品店を指し、「筆管児」とは、横丁西口の筆管横丁食料品店を指している。猫魚とは、店が猫をペットにしている人たちのために仕入れた小魚のことで、ひと山一角[10銭]で2匹の猫の2日分の餌になった。「春生」の雪里蕪と「筆管児」の猫魚のために、このようなささやかな熱狂が、たえず横丁に信じられないような楽しみと幸せな穏やかさをもたらし、彼女たちはこれらの省略化した言葉を会得しながら、さらに「まあ、あなたったら、まあ」とか言いながら、別れたり、いっしょに北口の「春生」や西口の「筆管児」へと向かう。

外祖母の家の長期滞在者になってから、私も何度となく雪里蕪を買いに春生にいったし、猫魚を買いに筆管児にいった。つり銭の小銭が残ると果丹皮や粽子糖を買うことができた。私も春生や筆管児と言うことを覚えた時、ようやく自分がこの横丁に受け入れられたのだと実感した。

その後、横丁はさらに激しく揺れだしたので、このようなくどくててきぱきとした会話はなくなった。ほどなくして、またそれぞれの屋敷の門は必ず開けておかななくてはならないという規定ができた。規定では、もし開けておかなければ中で必ず陰謀を計っていることになり、夜の決められた時間だけは閉めることができる、という。外祖母の黒塗りの正門も、横丁に向かって開けられるようになり、皆は屋敷内が終日衆人環視のもとにあると感じた。

その頃、外祖母の屋敷の西屋〔西棟〕に子供のいない中年夫婦——崔先生と崔夫人——が住んでいた。崔先生は傲慢で人付き合いの悪いひねくれ者で、若い頃日本に留学した経験があり、その時は、あるオートメーション研究所の高級エンジニアだった。夫婦二人は平穩に暮らしており、互いに相手の名前を呼び捨てにして呼び合い、互いに尊敬しあっていた。ある日、急に開かれた門から人が屋敷に突入してきて崔先生を捕まえていった。その後、10年間消息がなかった。そして、崔夫人はその日の夜発狂した。おそらく幻聴⁽¹⁾に属する症状ではなかったろうか。彼女は聞こえるすべての声が全部彼女を罵っているのだと言う。そこで、彼女は、いつも腕にプリント地の小さな風呂敷をさげ、物の怪にとりつかれたかのように、この屋敷と横丁から逃亡するようになった。人の話では、その風呂敷包みの中には黄金が入っているという。彼女は何度も逃亡し、そのたびに街道の幹部のおばさんに捕まって連れ戻された。街道の幹部たちは状況を連絡しあって言う。

「どこであの人をご覧になりましたか？」

「〈春生〉です。あの方はちょうどタバコを買うためにお金を取り出しているところでしたが、私は、ぐいっとあの手首を掴みまして……」

あるいは、こうも言う。

「あの方が〈筆管児〉を出てきたところを、私は見つけました。」

醤油の瓶をさげていた私は、まさに「春生」でそういう場面——崔夫人が誰かに手首を掴まれて——を見たことがある。

崔夫人にとって、世代的にみれば、私は彼女を崔お婆さんと呼ぶのがふさわしい。本来、彼女は背がとび抜けて高い、鼻がすこし赤い慈愛に満ちた女性だった。女性幹部たちが彼女の腕をねじ曲げて屋敷に連れ戻し西屋に鍵をかけ、見張り要員を派遣する様子を、私は見ていた。かつて中庭の棗の木の下に立っていた私は、崔夫人の逃亡成功を願ったことがある。彼女は絶対に横丁近くの春生でタバコを買ってはいけないんだから。まもなく、崔夫人が肺病で西屋で死んだ時、とび抜けて高かった背がひどく低く縮まっていた。

これら一切は、屋敷の門が開けられたことと関係があると、私はいつも思っている。

10数年後、横丁はまた落ち着きを取り戻し、それらの屋敷の門もまた閉じられた。人々は自分たちの屋敷内で自分たちのことをしていた。大人になった私が、また外祖母の四合院に来た時、崔先生がすでに屋敷に戻ってきていることを知った。しかし、戻ってきて、西屋の錆びた錠を壊して開けると、彼も発狂してしまった。彼はいつも頭にベレー帽を被り、ぱりっとした黒ラシャの中山服〔人民服〕を着て、手には楠のステッキを持ち、横丁を歩き回り、演説を行なった。彼はしかも両側のこめかみにそれぞれ一個ずつ画鋏（もちろん先の尖っていないもの）を貼っていたので、よけいに怖い顔に見えた。私は彼の演説を聞いたことはないが、目撃者はみな、あれは彼が模倣した施政演説だ、と言っていた。演説をする以外に、彼がとくに気に入っていたのは、いかにも悠然と歩いて

いる最中にいきなり振り返り、彼の後ろを歩いている人を驚かせることだった。そしてその後、何事もなかったように、体の向きを戻して、また悠然と歩き出す。

ある夏の静かな昼、横丁から大通りに行こうとしていた私は、偶然にもベレー帽を被った崔先生の後ろを歩いていた。それで私は、崔先生がいきなり振り返るかどうかと考えた。誰もいない静かな、門を堅く閉ざした狭い横丁の中で、突然の振り返りはたしかに背後の人を驚かせることができる。はたして、まさに私が筆管兎に近づいた時、私よりほんの2メートルしか離れていない崔先生がいきなり振り返った。そこで、私は青白くすこし浮腫んだ顔を見た。けれど、彼は私を見てはいなかった。その視線は私を避けて、私の背後の遥か後ろへと必死に注がれていた。その時、私の後ろには誰もいなかった。私の後ろには、私たちの横丁と私たちが共同で住んでいるあの屋敷だけしかなかった。崔先生はほんの短い時間見ていたが、すぐにまた体を戻して前へ歩きはじめた。

その後、私は崔先生を見たことはなかったが、彼に関するいくつかのエピソードはたえず聞いていた⁽²⁾。たとえば、彼の「施政演説」のために、再度失踪し再度現れたこと。たとえば、彼はかなりの額の未払い分の給料を受け取ったこと、そしてその大金を北京郊外に住む彼の甥に騙し取られたこと……。

意外だったのは、あの時の私が、崔先生の行為に驚かなかったことだ。あの時、私は崔先生の眼差しには瞬時の喜びと喜びの後の疑惑があったと感じた。彼は誰をも視野に入らずに自らを喜ばしながらひたすら後ろを見た。しかし、すぐにまた自らを訝りながら体の向きを戻して前へ歩いていったのだ。

何年もすぎた後でも、私は、早足で歩いていた崔先生が急に立ちどまり、いきなり後ろを振り向くその表情や態度を鮮明に思い出すことができる。そして私はついに彼が歩みをとめた理由がわかった。つまりそれは、崔夫人が呼び捨てにして彼を呼んだその呼び声を彼が聞いたからではなかったろうか。屋敷の門が開いていて、崔夫人が門前に立って、もしも筆管兎に行くならついでに猫魚を買ってきて下さいな、と彼に言ったのだ。しかし、崔先生はすぐに自分の耳を否定して、演説をするぞという抱負を抱いて前へ歩き出したのだ。

1994年3月6日

訳注

- (1) 幻聴：崔夫人の病気は、心の病気（精神障害）であるが、おそらく、「精神分裂病によく現われる幻覚は、幻聴、それもとくに、命令してきたり、自分を非難するような人の声（幻声）です」（『ホーム・メディカ 家庭医学大事典〈改定新版〉』97年9月、小学館）とされる、「幻覚」の中の「幻聴」（とくに「幻声」）の症状である。被害妄想による屋敷逃亡と幻聴症状はともに、精神分裂病に属するとされる。また、崔先生の「施政演説」は自らを為政者と妄想した誇大妄想によるものであり、横丁での突然の振り返りは、幻聴によるものであり、やはり夫人ともども精神分裂病の症状に属する。この散文「横丁の心象」（想像胡同）は、現在からみれば冤罪とみなされる文革犠牲者の精神的被害を題材にした散文である。鉄凝は、この散文の冒頭に記されているように両親の五・七幹部学校行きのため、文革の2年目の1967年から69年初冬まで、9歳から12歳までの約2年余、北京の母方の祖母の家に寄寓していた。この散文で記された崔先生の逮捕、崔夫人の発狂は、その時、見聞したものである。そして、崔先生の発狂は、70年代末ないし80年代初である。
- (2) 彼に関するいくつかのエピソードはたえず聞いていた。：崔先生のエピソードのうち、かなりの額の未払い分の給料を北京郊外に住む甥に騙し取られたことを題材にした短篇小説「死刑」（『長城』1987年5期）がある。「死刑」は、鉄凝の「長河落日篇之六」である。なお、この「長河落日篇」シリーズは、おそらく以下の7篇からなっ

ていると思われる。

- | | | |
|--------|---------------------|-------------|
| ①「色変」 | (『河北文学』87年1月号) | 86年9月18日執筆。 |
| ②「晩鐘」 | (『河北文学』87年1月号) | 86年10月9日執筆。 |
| ③「三醜爺」 | (『人民日報』海外版87年4月27日) | 87年1月執筆。 |
| ④「老醜爺」 | (『百花洲』87年4期) | 87年清明執筆。 |
| ⑤「醉年」 | (『太行文学』87年7、8月号) | 87年4月執筆。 |
| ⑥「死刑」 | (『長城』87年5期) | 87年6月16日執筆。 |
| ⑦「浮動」 | (『長城』88年2期) | 88年2月3日執筆。 |
- ②「晩鐘」は、初出では「長河落日篇」とあり、単行書『麦秸垛』(作家出版社、92年4月)では「《長河落日篇》之二」とする。
- ①「色変」は「晩鐘」と同じく『河北文学』87年1月号に掲載されたが、執筆順ではなく、その逆に、つまり「晩鐘」「色変」の順で掲載された。『麦秸垛』には「色変」は収録されていないが、「色変」が「長河落日篇」シリーズの1篇であることは、同時掲載の「晩鐘」がこのシリーズであること、また、王力平「《長河落日篇》文体闡釈」(『文論報』89年7月15日)に、「色変」をこのシリーズに含めて論じていることなどからみて、おそらくこのシリーズの「一」に当たるとと思われる。
- ③「三醜爺」は、初出や単行書『鉄凝文集3・六月的話題』(江蘇出版社、96年9)とも、「《長河落日篇》之三」というサブタイトルの記載がない。しかし、「三醜爺」がこのシリーズに属しているのは、王力平「《長河落日篇》文体闡釈」に、「晩鐘」「色変」「三醜爺」「醉年」「浮動」「死刑」の順で言及されていることにより、推測することができる。
- ④「老醜爺」は、初出、単行書『麦秸垛』とも「四」で変更なし。
- ⑤「醉年」は、初出『太行文学』の目次及び作品冒頭のサブタイトルに「《長河落日篇》之三」とあるが、単行書『麦秸垛』(作家出版社、92年4月)では、「《長河落日篇》之五」としている。
- ⑥「死刑」は、初出『長城』では、「《長河落日篇》之五」とするが、単行書『麦秸垛』では、「六」に変更している。
- ⑦「浮動」は、初出の『長城』88年2期に「《長河落日篇》之七」というサブタイトルが付されている。また、単行書『麦秸垛』でも同じく「七」としている。

パン祭

時として、頭が、もしもまるでふわふわした雲になったり、また、時として、まるで固い岩になったとしても。そういうふわふわした雲を追いかけたり、固い岩に穴をあけたいと思うのではないだろうか。成功したことのほとんどが半信半疑だとすれば、それは実に頑として固く、倒れても滅びないふわふわに感謝すべきであり、さらには時宜に適ったチャンスと必要な狡猾にも感謝すべきだろう。

そこで、突然、流暢に外国語がしゃべれたり、突然泳げたり、突然交際がうまくなったり、突然パンを焼くことができたりする。

私の父が幹部学校から戻って来れたのは、一つの偶然のチャンスのおかげだった、と父はいつも言っていた。つまり、廬山で、また何かの会議が開かれ、陳伯達も失脚したのだ⁽¹⁾。その影響は当時の中国のある方面に及び、幹部学校は乱れ、里帰りする者、病気にかこつける者、子供の面倒を見る者……彼らのほとんどは行ったきり戻らなかった。徐々に幹部学校は彼らを忘れてしまった。父の幹部学校からの離脱は、病気を口実にしたものだ。当時彼は本当に病気だった。幹部学校で

発作性心房細動という病気にかかり、症状が出ると心臓がどきどきし、心電図に心搏の絶対性不整脈が現われたのだ。父の帰宅は、遠くの親戚〔北京の外祖母を指す〕の家に世話になっていた私と妹の帰宅をももたらしてくれた。当時、私は十三歳〔57年9月生れ〕、妹は六歳だった。母はまるでわが家の担保のような役割として幹部学校に留められていた。

当時の父は、よく本分を守っていたが、一方で本分に安んじないところもあった。大風大波の中で、彼は極力自分の分を守っていた。そのため、軍宣隊〔解放軍毛沢東思想宣伝隊の略称〕、工宣隊〔工人毛沢東思想宣伝隊の略称〕の人たちが、彼を訪ねてきて話をした時に、彼らはいつも「あなたのように修養のある人」「あなたのように身分のある人」は、かくかくしかじかにすべきであると言った。そういう話には敬意がこめられたり、蔑視が含まれたりした。しかし、彼は本分を守っていたためか、結局大きな挫折はなかった。彼に関する大字報〔壁新聞〕は、たしかにあったが、それは誰かが彼の地位を羨ましがったからだ、と彼は言う。しかし、その地位はただか省レベルの劇場の舞台美術設計士兼隊長代理にすぎないものだった。そこで、誰かが大字報に次のようなことを書いた。つまり、彼は鉄姓ではなく、「修」姓である、と。その根拠は、彼はソ連製の自転車一台、ソ連製のラジオ一台、ソ連製の目覚し時計一個、ソ連製の腕時計一個を持っているからだ、と。それらを本当に持っていることを証明するために、大字報にはその四つの製品の商標さえも公表されていた。それらを順に記せば、「チラー」「東方」「平和」「キロフ」である。

「不思議だよなあ」と父は後になって私に言った。「どうしてだか、偶然、本当に全部ソ連製だったんだから」

その大字報の影響は大きくなかったが、その次にまた、彼に対するかなり重い爆撃がやってきた。その大字報には、次のように書いてあった。幹部学校には四十歳前の国民党員がいる、それを掘り起こしてみれば、きっと驚くことだろう。なぜなら「その人は平時きわめて身分のあるふりをしている」からだ、と。大字報には、その人の氏名が書いてなかったのだから、父も気にしていなかった。そのあと、彼に教えてくれる人がいた。「鉄さん、気をつけたほうがいいよ。あの大字報に批判されているよ」と。それではじめて父は張りつめた気持ちになった。しかし、彼は恐くはなかった。なぜなら、彼は四つの「ソ連修正主義」の製品は持っていたが、国民党との関係はないからである。会議でその大字報を利用して、遠回しに匂わせた人がいた時に、彼は怒って、言った。「ぼくは日本鬼子〔日本兵〕や偽軍〔傀儡政權の軍隊〕に会ったことがあるが、国民党だけには会ったことがない」彼はたしかに国民党には会ったことがない。彼は農村に生まれた。日本が投降した後、故郷〔河北省趙県〕は解放区になった。だから鬼子や偽軍には会ったことがある。だが当時の彼は児童団の団長だったのだ。

大字報の風波が去ると、父はまた本分を守りはじめた。その後、彼は病気休暇をとり、長期間職場を離れていたが、誰も近況を尋ねに来なかった。それはもしかして、彼が本分を守っているという印象を人に与えていたことと関わりがあるのかもしれない。

私たちを家に迎えてくれた父は、心房細動の病気をかかえてはいたが、本分を守っておとなしくしているのをやめた。彼は家を磨き、電気スタンドを取り付け、戸棚を作り、組板に鉋をかけ、古書や古い画報に目を通したり、さらにパンの製法を研究し、製造したりした。

当時パンは人々にとって高嶺の花だった。高嶺の花というのは、人々が頭の中で考えもつかない

ことを指しているが、そのため、父の研究、製造には、まるでブルジョア階級に一步一步近づいていくような、そういったいくぶん後ろめたい色彩があった。何年もたってから、私は取材をしている記者のような感じで父に尋ねた。「当時、パンを作ろうと考えたきっかけは何でしょうか？」

「説明しにくいけど。一種のあこがれかな」と彼は言った。

「それでは、パンの製法の知識や作った経験はありましたか？ たとえば、餅^餅を焼くためには、それ以前に他の人が餅^餅を焼いているところを見ていなくてははいけないと思いますが」

「なかったな」

「それじゃ、純粋に想像して作ったものでしょうか？」

「純粋に想像したものだね」

「どうして他の物でなく、パンを想像したのでしょうか？」

「パンが、摩訶不思議な衝動をかきたてたのさ」

父は練炭ストーブの盤の大ききくらの、ドアとドアの中に引き出しを付けた鉄の小箱を作り、その後、その箱をストーブの上にかぶせてしばらく焼き、饅頭を蒸す前の自然発酵した小麦粉団子をえぐり取って、引き出しの中に入れて焼いた。私たちはこれでパンができると思った。父と私と妹の三人は、ストーブの前にしゃがんで、ストーブの火で真っ赤になった顔をして、パンができあがるのを待っていた。父は、身体で私たちの視界をさえぎりながら、たえず引き出しを開けて焼け具合をみている。父はいきなりできあがり私たちにみせたいと思ったのだろう。私と妹には、焼けている小麦粉団子が見えなかった。だから父の顔の表情をじっと見つめるしかなかった。しかし、父の表情は曖昧な感じで、まことしやかにたえず腕時計——例の「キロフ」だが——を見た。しばらくして、パンを取り出すことになったので、私と妹は興奮した。ところが、父は興奮していなかった。彼はとっくに堅い黒焦げ小麦粉団子を覗いていたからだ。真ん中から割ってにおいを嗅いでみると、酢酸のにおいが鼻を突いた。彼はバツが悪そうに笑って、ストーブの温度が足りなかったのと、焼く時間が長すぎたためだと教えてくれた。妹は何だかわからないといったふうに火箸でその鉄の小箱を叩きながら言った。「このストーブね」と。父は彼女に叩かないようにと注意して、改良しなくてはならない、と言った。その後、彼はその小箱の中に黄色い泥を厚く塗って、言った。「見たことないかい？ 街で焼き芋を焼く炉に泥が入っているのを。あれは温度を上げるためなんだよ」次に焼いた時には、泥が焼けて、鉄の引き出しの中に落ちてしまった。

その後、彼はその小箱をあきらめて、画を描きだした。彼は新しいオープンの画を描いた。立面図と断面図を描き、正確な長さ、必要な鉄板の厚さの寸法を表示した。彼は画を描くことができる。舞台設計師なら誰でも自分が設計構想したアウトラインや設計図を描くからである。彼は画を描くと、彼の「チラー」に騎って道路沿いの鋳掛け屋を探した。その後、ある鋳掛け屋がその仕事を引き受け、彼のために新しいオープンを作ってくれた。新しいオープンがストーブにセットされると、父はまた小麦粉団子を引き裂いて中に入れた。私と妹がまた彼の表情を観察した時、彼は自信ありげに言った。「よし。まずまずだ」

パンがオープンから出された。私たちが歓声をあげたのも無理はないほど、色は本物そっくりだった。父は大きく息を吐きながら、火傷しそうに熱い固まりを割ろうとしたが、それは面倒な作業——割るのに苦勞していた——だった。しかしそれでも彼は私たちにそれぞれ一個ずつ分けてくれた。

自分の分として残した一欠けらを口に入れてちょっとかじってみて言った。「どうだい？ 焼き饅頭の味は」私と妹は二人ともその厚くてカリッとした堅い皮をもぐもぐ齧りながら、おいしいけど、パンには似ていないなと思った。それで、私たちは返事しなかった。

その後、父はしばらくの間意気消沈していた。一日中本や画報をめくってばかりで、ドアの後ろに置かれたオープンの上には白菜やジャガイモが放置されていた。

ある時、『ソ連婦女』を読んでいた彼が私に言った。「みてごらん。パンだよ」私は花柄のカーテンのかかった窓の手前に大きな食卓があるのを見た。テーブルには、グラスや花や美しく並べられた料理が置いてあり、そして大皿にきれいに並べられたパンがあった。父の焼いたパンと比べてみると、写真のパンの何とふんわりと柔らかそうに見えたことか。

たぶんその画報のパンに刺激されてのことと思うが、翌日、父はお店から乾燥した黒い丸パンをいくつか買って来た。当時、私たちの都市には「一食品」という名の食品工場があり、パンと称されたこういうパンを製造していた。しかし、それはやはり饅頭とは違った味をしていた。私たちは分け合って食べながら、パンというのはいったいどんなものを言うのかを話し合い、分析した。私たちはみんなが意見を言った。

その時の発言は、父にふと故郷のある叔父さんを思い出させた。1940年代、この叔父はある田舎の教会で、あるスウェーデンの牧師のゴックをしていたことがある。その後、その牧師はスウェーデンに帰り、叔父は農民になった。父はわざわざ彼のところへ訪ねていった。しかし叔父さんの言うには、その北欧の伝道者はパンには無頓着で、いつもはジャガイモに塩をかけて食べていただけだとのこと。叔父さんはパンの作り方を思い出してみたが、彼によれば、それは饅頭を焼くのと同じだということだった。叔父さんの覚えていることと、父の知りたいこととはかなり違っていた。叔父さんのところからは、二分の一冊の西洋料理の本を持ち帰っただけだった。その本のあと半分は叔母さんが靴の型紙として切り抜いてしまっていた。パンは部分的には載っていたが、しかし、作り方についてはとりとめがなくよく分からない。たとえば、その本では次のように述べている。小麦粉を水でまぜて発酵させる時には「乾燥酵母一杯」が必要である。この「一杯」が結局どのくらいの量なのかしばらく問わないとして、この乾燥酵母とは、当時の一般的な中国の家庭にしてみれば、おそらくは原子迎撃ロケットやロックンロールやピエール・カルダンの類と同じようなものだったろう。なお、その本は初期の翻訳であるためか、「^{サンミンチ}三明治 [サンドイッチ]」を「薩貴赤」と訳していた。

ある日、父はついに新しい興奮をともなって帰宅した。彼は家に入るやいきなり大きな声で叫んだ。「わかった、わかった。パンの発酵にはホップを使うんだ。饅頭を蒸すのとは全然違っていったんだ。本当だぞ」私はホップという変な言葉を聞いたので、それがどんなものかを尋ねた。すると父も見つけないと答えた。ちょっと考えてから、父はまた言った。「たぶん漢方薬のようなものだと思うけど」私は父に、どこから聞いてきたのと聞いた。彼は言った。バス停でバスを待っていたら、中年の婦人2人がおしゃべりしているのを聞いた。一人のほうがもう一人に聞いた。久しぶりだね、いまだここに勤めているの。もう一人が「一食品」のパン製造部にいると答えた。その後、父はこの「一食品」の女工さんと話をしたのだ。

その日、父はホップとわかった興奮で一晩中眠れなかった。翌日、彼は「一食品」に遠征してめ

ざすものを見つけた。当然、理由もなくメーカーから原料を手に入れるには、面倒な手続きが必要である。そのため、彼はざるをして自分の謎めいた貧相な事業を隠し、薬の調合のためにホップが必要で、ホップは調合薬の中の種類だと言った。すると、誰かが傍から、それは新疆から「輸入」したもので買い付けるのが大変なのだと、要領をえないありがた迷惑なことを言った。しかし、父はどうやらはじめから最後までそれを漢方薬の材料だといいつづけることができた。

「すごく高いんだ」と彼は漢方薬の包みくらの大きさの紙包みを私に見せた。「これだけで、六元だ」

その日、父は愚かにも「一食品」のパン製造部を見学したいと申し出たが、拒絶された。当時はパンも含めて菓子類の製造は一定の秘密主義をとっていたようだ。幸いにその女工さんが、すでに彼にその使用法を教えてくれたので、これ以後、彼は一年余り中断していたパン事業を再開しはじめた。

彼はホップを使ってお湯を沸かし熱湯で小麦粉をこね、発酵させ、取り出してこねてガス抜きをし、また発酵させ、また取り出してこねてガス抜きをし、また発酵させ……一つの手順を完成させるには二日二晩の時間がかかる。要求通りに厳格に時間を守るために、彼は彼の「平和」目覚し時計のねじをしっかりと巻いた。たとえ深夜に「平和」のベルが鳴っても、彼は起きて小麦粉を取り出しこねてガス抜きをした。一定の温度に保つために、彼はそのボウルをかけ布団でしっかりと包んだり、ストーブの傍に移動したりしては、ボウルの中に温度計を入れてたえず計った。

ある日の夜、彼はついにその新しいオープンの中から火傷しそうに熱い鉄の大皿を取り出した。その鉄の大皿には六個の小さな丸いパンが並んでいた。彼はせいろ布を敷いて火傷しそうに熱い鉄の大皿を私たちの前に掲げて言った。「ほら。みてごらん。これが何かわかるかな？ もっと早くにわかっていたらなあ！」私は、火に炙られた、興奮した父の顔色を見て、大人がいつも子供に言う言葉——見せびらかす——を思い起こしていた。

父は見せびらかしていた。もしも家庭の中で子供と大人が平等の地位を持っていたら、私が父をこんなふうには評価してもいいのではないだろうか。私は鉄の大皿の中で何が起こったかをとくに知っていたので、宿題をしていた手をとめて駆けていった。妹はなかなかオープンから出てこないパンを待っていたために、まぶたがくっつきそうになっていたが、いまはもう元気になった。父は私たちに一個ずつ分けて言った。「ほらほら、食べてごらん。はやく食べなさい！」彼は鑑定の権利を、頑として私たちに譲ろうとした。この時は基本的には成功していた。第一に、それは完全に饅頭の属性から離れていた。第二に、色とつやともに正常だった。欠点はやはりその柔らかさにあった。

言うまでもなく、最も自信があったのは、やはり父だった。

その後、彼は結局またあの女工さんを訪ねた。女工さんは、このパン熱狂者に、思い切って製造部の劉という名の職人を紹介してくれた。彼はこの劉さんから何が重要かを理解した。たとえば、発酵後にオープンに入れる前の醒面〔練った小麦粉を柔らかくする、寝かすこと〕、および醒面する時の妥協のない温度管理、そして、さらにより厳しい温度管理である。

その後、父は彼のパンが「一食品」（この都市には「二食品」はないが）で作るパンよりもいい品質だと確信した時、彼は清潔な紙にパンを一個包んで、そのパン職人の家へ持って行って鑑定して

もらった。

父はその時の様子を回想して、言った。その夜、劉さん一家5,6人はちょうど部屋で夕食を食べていた。彼らの目の前に、大きな鉄の鍋があり、鍋の中にはどろっとしてねばねばしたトウモロコシの粉のお粥が入っていた。その傍らには漬物があった。たったそれだけだった。彼はパン職人のその日の夕食を生涯忘れないと言った。

パン職人が父のパンを試食すると、笑顔で父に言った。「いい具合にできてるよ。昔からここまで研鑽した人は多くない。おれの弟子の腕なんか、パン作りを習っているんじゃないで、カステラ作りを習っているんだからなあ。十斤の卵を小さな瓶に割って、竹のささらでかきまぜるのに、半日の時間を要する。どんなことでも時間がかかるし、時間が足りなければ慌ててもしょうがない」彼はまた小さく切って口に放りこみ味わい、残ったものを彼の子供に分けてやり、また父をほめて「いい具合にできているよ」と言った。

父は成功したことで、さらに分に安んずることができなくなってしまった。どうやらパンの発酵過程において、彼の頭をも発酵させてしまったらしい。彼は彼のパンをより高次の段階へとおしあげようと決心したのだ。

当時、ニメイリ⁽²⁾、ルバイ⁽³⁾、シアヌーク⁽⁴⁾がしょっちゅう中国を訪問していた。彼らの訪問の直後、いつでも大型記録映画が放映された。飛行場での出迎えから会見、参観、迎賓の宴会までを記録した映画である。父はこれらの映画を毎回欠かさず見たし、私たちにも見るように呼びかけた。見る時には、彼はあの盛大な政府主催の宴会だけを注意深く見た。一番彼を興奮させたのは当然主賓のテーブルの各人の前に置かれた二つの小さなパンだった。彼は私たちがこのディテールを見逃してしまうのではないかと心配して、私たちに声をかけた。「見てごらん。よく見てごらん！」その後、彼は、思い切って、政府主催の宴会でのあのパンを「ニメイリ」と呼ぶようになった。それは二つ並んだ橄欖のような形の、薄黄色を呈した、高貴な黒光りを発する、小さなパンだった。父は言った。彼はそのパンの原料の調合の比率や製造過程を推測できる、次の目標はこの「ニメイリ」だ、と。

「ニメイリ」を焼くために、彼はまた発酵のやり方や熱の伝導効率を改良した。彼はオープンの上部にアーチ型の鉄板を取り付け、これまでのオープンは直熱式だったが、今度は還流式だ、と言った。

彼は「ニメイリ」を焼きあげてから、言った。「パンを見るときには、その外観を見るだけで、当然その味や繊維組織や一連の製造工程を推測できる」と。以後、私もパンを分析するという習慣を身につけた。何年もたってから、実に私は、かつてニメイリがすわっていたその椅子にすわったことがある。ニューヨークのマンハッタンのホテルや、北欧や香港の高級レストランの椅子にすわったりして、さまざまなパンを食べたが、そんな時はいつも父の「ニメイリ」と比較した。父の「ニメイリ」は私がパンを分析する際の基準となってしまう。おそらくこの基準の本当の原点は、当時父が私たちのために作り出してくれた予想外の雰囲気にあるようだ。何はともあれ、当時の父はすでに資格のあるパン職人になっていた、と私は思う。

ここ何年間か、父は北京の新僑飯店の発酵作業や上海の益民廠の発酵の工程や北京飯店や、スウェーデンやスコットランドや……などのパンの製法に関する本を何冊も買ったり、オープン・トースターを買ったりした。私たちの住む都市でも、すでにフランス式や香港式やオーストラリア式の

パンの製造ラインを取り入れており、パンの製造は、もうかつてのパンの製造部でさえ父の見学を許さなかった頃の秘密主義の時代ではなくなっている。しかし、父はもうパンを焼くのをやめてしまった。彼は彼の本分である画を描く仕事をしている。画を描く時間外に、時々気ままにそれらの本をめくりながら、言った。「あの時、ぼくがやっていたことは、この工程と同じだ」と。その後、私は、大学での専門としての発酵学のこれまでの学問の歴史が、作曲学や高エネルギー物理学のような専門分野と同じ長さを有していることを、偶然に知った。

錆びた古いオープンが、画箱が寄りかかる支えとして、彼の画架の傍らに置いてある。たぶん父はその存在を忘れてしまっているかもしれない。しかし、それは過去の生き証人のように、私たちのために、もはや再現できないあのパンの歳月を固守している。

1989年12月

訳注

- (1) 廬山で、また何かの会議が開かれ、陳伯達も失脚したのだ：1970年8月に廬山で開催された中共第9期2中全会で、陳伯達が失脚したことを指す。「陳伯達は林彪の講話に積極的に追従して発言し、華北組での発言においては、江青グループの張春橋らを攻撃し、また林彪の演説原稿に入念に手を入れた」。毛沢東は、8月25日に陳伯達を厳しく批判し、「私のわずかな意見」を書き陳との距離を指摘した。9月6日、廬山での全体会議が閉幕し、「陳伯達の審査を行うことを宣言した。11月、中共中央は陳伯達の反党問題を伝達する指示を出し、その後は陳伯達批判の整風運動が展開された」。81年1月、最高人民法院特別法廷の判決で、陳を林彪・江青反革命集団事件の主犯とし、懲役18年、政治的権利剥奪5年の刑に処した。88年10月、病気のため保釈、89年9月20日死去。（『中国文化大革命事典』96年12月、有限会社 中国書店）。70年当時、陳伯達は華北で重要な地位にあったと思われる。
- (2) ニメイリ：ヌメイリ或いはヌメイリーともいう。1930～。スーダンの軍人、政治家。1969年のクーデター後、スーダン革命評議会議長となる。71年に親ソ派将校のクーデターで一時失脚するが、リビアなどの支援で3日後に政権に復帰し、スーダン社会主義連合を設立、同年、初代大統領に就任。73年、軍最高司令官も兼任。85年の軍事クーデターで失脚し、エジプトに亡命。『新中国紀事1949-1984』（東北師範大学出版社、86年2月）の1970年の頃に、次の記述がある。「70年8月6日～13日、スーダン民主共和国革命指導委員会主席、総理兼外交部長・ガファール・ムハメド・ニメイリはスーダン友好代表団を引率し、中国の招請に応じ、公式訪問をする。」
- (3) ルバイ：1934～78.6。イエメン民主共和国の政治家。1969、71年、大統領評議会議長（元首）に就任。『新中国紀事』の70年と74年の項に次の記述がある。「70年8月2日～13日、南イエメン人民共和国総統委員会主席・サレム・ルバイ・アリは、南イエメン人民共和国代表団を引率し、中国の招請に応じ、公式訪問をする。」[74年11月10日～18日、中国政府の招請でイエメン民主人民共和国総統委員会主席・サレム・ルバイ・アリは中国を訪問する。]
- (4) シアヌーク：1922～。カンボジア三派連合政府大統領、元国家元首。70年、訪ソ中にクーデターで元首解任、北京で王国民族連合政府を樹立し、ロン・ノル政権打倒の闘争を推進。79年のヘン・サムリン政権成立後は独自の中立カンボジア政権樹立工作に従事。『新中国紀事』には、70年10月10日に、中国がカンボジア国家元首シアヌーク親王、カンボジア民族統一戦線中央政治局、カンボジア王国民族団結政府の共同声明を断固支持する旨の声明を出したと、記されている。

一千枚のキャラメルのお包み紙

小学一年生の夏休み、私は北京にいる母方の祖母の家に行きお客さんになった。「憎まれ盛りの七つ八つ」の年頃の私は、祖母の四合院のいたるところで笑ったり騒いだりしてうるさくしていた。おまけに、隣家の屋敷の世香という名の女の子が駆けてきて私の友だちになってくれたので、二人の

いろいろな遊びはそれまで以上に祖母の家を落ち着きのないものにしてしまった。

私たちは中庭でゴム跳びをして、黒レンガの地面を蹴ってトントン音をたてた。また、ナツメの木の下の四角いテーブルで「お手玉」遊びをして、「お手玉」をテーブルの上にジャラジャラジャラと撒いては何度も何度も音をたてた。さらに、竹竿を高く持ちあげてナツメの実を叩き落して食べた。青々としたナツメの実が地面のいたるところにころがった。あなたの声が高くっても、私の声のほうがきつともっと高いわよ、というふうに、私たちは歌の競争をした。母方の祖母の家の、私が表姑〔父とは姓の異なる父の従姉妹〕と呼んでいた人が私たちに言った。「あなたたち、疲れるってどういうことか知ってる？」私と世香は互に見つめあってから、わけもなく笑い出した——何かその質問に可笑しなところがあつたからではなかったけれど、いったん笑い出したら止まらなくなってしまい、息継ぎができなくなるほどだった。そうよ。疲れるってどんなことかしら。私たちはいままで疲労の問題なんか考えたこともなかった。ときどき、大人が「ああ、死ぬほど疲れる！」と言うのを聞いたことはあるけれど、それは大人だから、そんなふうに感じるんだろうし、「疲労」と私たちとは無関係なほんとに遠い存在だと思っていたのだから。

笑いすぎて息が苦しくなって笑えなくなった私たちに、表姑はまた言った。「世香はキャラメルの包み紙を持ってたんじゃない。あなたたち、キャラメルの包み紙を集めてみたらどうかしらね」そういえば世香はたしかに彼女が集めていたキャラメルの包み紙を私に見学させてくれたことがあつた。彼女は美しいセロハン紙の包み紙数十枚を薄い本の間に挟んで保存していた。しかし私は彼女の包み紙を見ても興味を示さなかったし、表姑の言葉を本気にするつもりもなかった。表姑も私と同じく母方の祖母のお客さんだった。彼女は祖母の家で病氣療養していた。

ところが、世香は興味が湧いたのか、表姑に尋ねた。「おばさんはどうして私たちにキャラメルの包み紙を集めたらっていうの？」表姑は、キャラメルの包み紙をたくさん集めたらいい物と交換できるのよ、たとえば、一千枚の包み紙なら電動犬一匹と交換できるのよ、といった。私と世香は表姑の話にあっけにとられた。私たち二人はデパートでそういう新しい玩具を見たことがあつた。犬のお腹に電池が入っていて、スイッチを入れると、毛のふさふさした小犬がワンワンと吠えながらこちらに向かってきた。電動犬はいまの子供なら珍しがらないだろうが、二十数年前の、玩具の種類も数も不足していた時代の中国では、表姑の承諾は、私たちを長いこと興奮させずにはおこなかつた。それは何とすばらしい財産だろうか！ 何とすごい楽しみだろうか！ ましてや、その財産や楽しみは、私たち自身の労働によって交換するのだから。

私は矢も盾もたまず表姑にキャラメルの包み紙が全部集まったら誰ののところへ行って犬と交換するのかを聞いた。世香のほうは表姑に集めるキャラメルの包み紙に何か決まりがあるのかどうかを事細かに聞いた。表姑は、透明なセロハン紙で、一枚一枚全部びんと伸ばして皺がないようにしなくてはいけないのだと言つた。全部集まったら表姑に渡せば、彼女が私たちに電動犬を交換してあげられるという。

一千枚のキャラメルの包み紙で一匹の犬と交換するのなら、私と世香がそれぞれ一匹ずつ換えるとなると、二千枚の包み紙が必要だ。小さな数ではないが、しかし私たちは自信満々だ。

それからの私と世香は、もうゴム跳びもせず、ナツメを棒で叩き落して食べたりもしないし、お手玉遊びもせず、声をからげて歌の競争もやめた。祖母の四合院は元のように静かになった。私た

ちは早くもキャラメルの包み紙を集め始めていたのだ。

さまざまな種類のキャラメルやドロップは、いまの子供たちにはとうに飽きられてしまったが、昔の私たちは、飴に対して限りない関心を寄せていた。子供たちのポケットの中にいつでも飴が入っているわけではなかったし、飴の包み紙——とくに高級なキャラメルを包んだセロハンの包み紙——が、どこでも目にふれるわけではなかった。まず私と世香は、持っている小銭全部——しかし、私たちのお金では数十個の高級キャラメルを買うことしかできなかった——で飴を買い、そして、私たちは喉がひりひり痛くなくても気にもせずしゃかりきになって飴をなめた。そうやってやっこのことで飴の包み紙を手に入れた。私たちは大通りや路地を隈なく回って、隅っこのほうに捨てられている包み紙を探し歩いた。風にひらひらと舞う包み紙を追いかけて長時間横丁を駆けずり回った。また、食料品店の御菓子のカウンター近くで、子供を連れて飴を買いに来る大人たちを辛抱強く待った。大人たちは飴を買った後、包み紙を剥いて飴を子供の口に入れてやる。その時、私たちは地面に落ちた「上海タフィ」や「バター・コーヒー」などの包み紙を、飛ぶようにして拾った。さらに、私たちは世香の親戚の結婚式に出席したことがある。結婚式での地面にあふれた飴の包み紙は、私たちを狂喜乱舞させた。いますべての大人が結婚してほしい！そしてそのすべての結婚式に私たちを招待してほしい！そんなことを私たちは、どんなにか願ったことだろうか。

私たちはそれらのしわくちゃな包み紙を家に持ち帰り、水を張った洗面器の中に浸して包み紙を平らに伸ばした。それから、一枚一枚ガラス窓に貼り付けた。包み紙が乾いたらそっと窓から剥がした。包み紙は新品同様ぴんと平らになった。

まもなく夏休みが終ろうとする頃、ついに私と世香は二人とも一千枚ずつ飴の包み紙を集めきった。ある午後、表姑が昼寝からさめて坐ってお茶を飲んでいたら、私たちは彼女の前に近づいていき、二千枚の飴の包み紙を献上した。

表姑が怪訝そうに私たちにどういふつもりかと聞いたので、犬だよ、私たちの電動犬だよ、と私たちは答えた。表姑はちょっとぼかんとしていたが、すぐに笑い出し、いつまでも、息継ぎもできないほどに、笑いつづけた。これ以上笑えなくなって笑うのをやめた彼女は、笑いすぎて出てきた涙をぬぐってから、言った。「あんたたちが、いつも庭でうるさくしていて、静かにならなかったから、表姑があんたたちをからかったのさ」

世香がちらっと私を見た。その目は悲憤と絶望に満ちていた。その眼差しには、私への蔑視——結局、私たちをからかったのが私の表姑なのだから——も含まれているなと感じた。その時、疲れたという感覚が急激に私を襲った。私は初めて大人たちがいつも言っている疲労を体験した。疲労とは、いわゆる胸の中の心の突然の負荷だったのだ。

私と世香は私たちの包み紙を庭に持ち帰った。庭の戸口で、私は精魂こめて「身なり」を整えた千枚の包み紙を空に向かって投げた。包み紙たちはまるで色鮮やかな蝶のように風に乗って飛んでいった。

私は大人になり、多くの本を読み、多くの文字を知った後で、「詐偽」という語を見るたびに、いつも真っ先に「表姑」という言葉を連想してしまう。この二つの語はかくも緊密に私の意識の深いところで接している。時の流れもそれらを完全に分かれさせることはできないでいる。だから、いつのまにか気がつかないうちに大人が子供の心を深く傷つけることがあることを、しかもその深い

傷がいつまでも子供の記憶に残るということを、私は信じる。

子供を批判してもいいし、叱ってもいい。でも、子供を騙してはいけない。本来詐偽は最も深刻な傷害なのだから。

私たちはすでに大人になったけれど、でも、すべての大人は、誰でも子供時代があったではありませんか。

1992年⁽¹⁾

訳注

(1) 1992年：この執筆日時の記載は、鉄凝『鉄凝文集5・女人的白夜』（江蘇文芸出版社、96年9月）の当該作品末尾の記述による。

母のバス・パフォーマンス

ここで話したいことは、私の母のバス乗車時のいくつかのパフォーマンスであるが、その前にまずは母の職業について述べておかななくてはならない。

母は退職する前は、声楽の教授だった。彼女は自分の職業に満足していた。もっと言えば、熱愛していたと言ってもいい。だから、彼女は、当初、退職とどう向き合ったらよいかわからなかった。彼女は、彼女の学生といっしょにいるのが好きだったし、日々繰り返される彼女の訓練によって、彼女（彼女）らの未熟な声が日々成熟し美しくなっていく、その変化する様を見るのが好きだった。彼女の養成を経て音楽部門の国内の最高学府の入試に合格した学生たちが休暇で帰省した時に、彼女の所に訪ねて来てくれるのが好きだったし、学生たちからさまざまな年賀状をもらうのが好きだった。もちろん、母は時として学生に腹を立てるのも好きだった。母の言葉で言えば、通常、彼女が腹を立てるのは、発声練習や歌に取り組んだ時の彼らの「不真面目」や「鈍さ」のせいであるという。しかし、私から見れば、学生に対する母の腹立ちは、ちょっとばかりオーバーアクションの感じがした。母が教室でどんなふうに教えているかを見たことはないが、ときどき私は彼女が家でレッスンしているのを見たことがあった。学生が立ってドレミ音階で歌い、母がピアノの前にすわって伴奏する。学生がとちったりすると母はすぐに腹を立て、いきなり手に力をこめて、ピアノを鳴り響かせ、学生の声をかき消してしまう。不思議なのだが、私は母の「腹立ち」に対していままで一度も驚いたことがなく、そういう時の母は教授らしくないな、むしろピアノの前で駄々をこねている子供のようだという思いを強くするだけだった。そんなふうに怒る必要あるのかしら、と私は陰で冷笑しつつ思った。今は昔と違って、今の若者でお母さんの腹立ちに付き合う人なんていないんじゃないのかしら？ しかし、母の学生を観察してみると、彼らはやはり自分たちの徐先生（母の姓は徐）を恐れているようだった。徐先生の腹立ちが、技術を伝授する時の少しの保留も私心もない献身的な態度であることを、学生たちは知っていたので、彼女に従ったのだ。だが、母は退職した。

退職した母は、あらたまった様子で、私が私の知人や同僚に対して、彼女が退職したことを教え

ないほうがいいのではないかと、私に語ったのを覚えている。退職して何か不都合でもあるの、少なくとも毎日混みあうバスに乗らずにすむのよ、お母さん、バスの混むのには閉口するよ、へとへとに疲れるし、時間の無駄だわと言ってたじゃないの、と私は言った。母は私にきまり悪そうに笑ったが、自分の考えを否定はしなかった。でも、その表情からは、満員のバスに乗ることに対する一種の未練があることが明らかに感じられた。

母の仕事はバスと密接な関係があった。彼女はこれまでバスで通勤退勤を行ってきた。バスは彼女の声楽の職業と結ばれており、彼女と教室と学生とのすべての活動と結ばれていた。これまで生きてきた彼女の時間の多くは、バスの中で過ごしてきたのだ。もちろん、バスのほうからみれば、数十年間も彼女に奔走の苦しみを味わわせてきたともいえる。中国において、混まないバスや、待っていたり追いかけたりしなくてもすむバスのある都市を、私は聞いたことがない。私たちの都市も御多分に洩れない。母は年がら年中バスを待ったり、追いかけたりする実践の中で、一連の乗車の経験を積んできた。ときどき私は母といっしょにバスに乗ることがある。母はどんなに混んでいても、いつでも前のほうで乗りこむことができた。彼女は乗車すると、座席争い（座席が空いている時に）をしながら、私に話す。混んでいる時には必ず端に寄らなくてはいけないし、できるだけ車体にぴったりくっつかなくてはいけない、そうすれば、ドア附近にたむろする人たちに順調に「押され」て乗りこむことができるのだ、と。考えても御覧なさい、60歳をすぎた婦人にとって、これは何と危険な行為ではないだろうか。たしかに私は母が混みあったバスに乗車する危険な行為をこの目で見た。遠くからバスが来るのが見えると、彼女はきまってバスの前方に向かって突っこんでゆく。その時のバスのスピードは遅いが、停車しているわけではない。母は車両の前方をよけると、車体の側面にぴったりくっついて車両とともに走り出す。ついにバスが停車すると、彼女は近くのドアをつかんで一気に跳びあがり乗りこむ。彼女は乗りこむと、バスの外でまだもたもたしている私——彼女は私のためにやきもきしているのだ——をせかしつつも、上から見下ろす優越感と得意然とした態度——バス乗車において私よりも機敏であることに対して——を垣間見せたりもする。こういう彼女の態度から、混み合うバスへの不満と巧みにバスに乗りこめた得意とを比べてみて、母が後者をより重視していることを、私は即座に読み取った。こういう母の心理状態からか、母といっしょにバスに乗車した時の私は、何やら母娘の同行ではなく、母に引率されているのだという思いにとらわれてしまう。この引率と被引率の関係は、車内での母をいつも私より多忙にかつ主体的にさせてしまう。たとえば、幸いにして同時に二つの座席を確保できたのに、私が彼女からちょっと離れた場所にいた時、彼女はいつも近くに立っている乗客の白眼をも顧みず、確固として私にすわるようにと私の幼名を呼んだことがあった。たとえば、ある時、何日か熱が下がらなかったのも、バスで病院に出かけた時に、母は車内で乗客に娘をすわらせてほしいと頼んだ。しかし、その時の彼女の「頼み」は功を奏さなかった。すわっていた乗客は、私が病気だという母の声明を聞いても席を譲らなかつた。まちががなく、私は熱があったためにたしかにすこし赤い顔をしていたのだが、他人から見れば、健康な色つやと見てとれたかもしれない。とすれば、若くて元気な色つやのいい者に席を譲る必要などないではないか。その時、立っていた私は、顔がさらに赤くなった。母の「おせっかい」に内心腹を立てながらも、それまでの母のバスの乗り降りに関するさまざまな態度を思い出していた。次第に車内が空いてきて、多くの座席が空いていたが、私はふてくされた

ように立っていた。母が座席に固執する分だけ、いよいよ私は空いた座席を無視する態度に出ているようだ。

ここ数年、私たちの都市の公共交通の状態は次第に緩和してきた。ところが、バスに乗る時の母は、依然として長年培ってきた乗車方法に固執している。たとえ、バス停に私たち二人しかいない時でも、彼女は必ずまだ停車していない車両を追いかけはじめる。それからドアに張りつき乗車する。彼女が編み出したこのスリルは、いつも私に眩暈を起こさせる。私が彼女に、そんなことをする必要がないこと、万一バスに倒されたら、走っている時に足をくじいたらどうするの、と注意したのは一度や二度のことではない。そんな注意が無駄だということを私は知っている。なぜなら、母は注意した後でも相変わらず同じことをやるからである。そのたびに私は、意識的に母から遠く離れることにしている。バスの中ではわざと母のそばに立ったり（あるいはすわったり）しない。私は遠くから母が座席を確保した後の満足した様子を眺める。母もこちらの私に向かって口を開く。つまり、すみずみまで気を配り座席を確保せよと注意を喚起しているのだ。しかし、私の拒絶の表情が母にすこしばかりの「ひるみ」を生じさせる。私の顔を見た母の「ひるみ」を、こちらから眺めているうちに、私は急に、母が編み出したすべての「スリリングな行為」が、実は私の幼年や少女時代と関連があると感じた。幼年時代、少女時代の私の記憶の中では、母はいつもさまざまな混みあった行列の中にいた。焦燥、待機、追走……他人を押しのかたり、また他人に押しのかられたりした。旧正月には豚肉や鶏肉や春雨や豆腐を買う行列、配給切符で月餅やマッチや洗剤を買う行列、割り当ての食用油や強力粉の行列、汽車の乗車券や長距離バスの乗車券の行列……何でもその当時はきわめて貴重だったのだ。どの行列でも貴重なそれらの品物の突然の完売宣言で解散した。母の世代の人たちは、このような行列の中で、このような待機の中で、常人では理解しがたい「腕前」を編み出したのであり、そういう「腕前」が不要になったいまでも習慣化しているのである。

混みあったバスの苦しみから生まれた喪失感を、今後新たに母が与えられることはないだろうことを、私は次第に理解しはじめた。バスを待ち、満員バスに揺られることが母の声楽の教育事業の一部だったこともわかった。彼女は家と事業とを結ぶ輪の役割を大事にしたのだ。しかも、それを大事にしたからこそ、車内で与えることのできる彼女の「庇護」を自分の子供に与えたいと思ったのだ。それは、彼女にとって一つの「特許」になっているのではなかろうか。まるでかつての歲月の中で、彼女が自分の子供や家のために、数え切れないほど何度も何度も長蛇の列に並び、騒がしい人々の群の中で食料品や日用品を確保しようと悪戦苦闘したことと同じように。

ほどなくして、母は時を同じくして二つの大学から声楽教育を継続するよう招聘を受けた。彼女はとても感激した。なぜなら、彼女はまた学生たちといっしょになれるからであり、鍵盤をたたきながら彼女の学生に腹を立てることができからであり、また彼女の満員バスでのパフォーマンスができるからである。もう私は、母が作り出したスリルを責めようとは思わない。「江山は改め易く、乗性は移し難し」[山河は容易に移り変わるが、人の本性は変わることがない。三つ子の魂百まで]という諺を知っているのだから。

えっ？ ということは、満員バスで押し合い圧し合いする「趣味」を、母の乗性[本性、性格]だと本気で思っているわけ？

1997年8月15日⁽¹⁾

訳注

- (1) 1997年8月15日：この執筆日時の記載は、「她們文学叢書・第三輯」の鉄凝『想像胡同』（雲南人民出版社，98年3月）の当該作品の末尾の記述による。

鉄凝散文（1）訳者後記

今回訳出した鉄凝の散文作品は、次の(1)～(5)までの5篇である。

- (1) 『女の白夜』まえがき（写在巻首）〔鉄凝文集5・女人的白夜〕1996年元月
- (2) 「横丁の心象」（想像胡同）1994年3月6日
- (3) 「パン祭」（面包祭）1989年12月
- (4) 「一千枚のキャラメルの包み紙」（一千張糖紙）1992年
- (5) 「母のバス・パフォーマンス」（母親在公共汽車上的表現）1997年8月15日

鉄凝の散文を翻訳・紹介する目的は、次の2つである。1つは、鉄凝の文学世界が小説だけでなく、散文においても優れていること、もう1つは、鉄凝の小説の源泉ないし題材を知る上で、散文を読むのが有効であること、である。

鉄凝散文の全体像を知るために、『女の白夜』まえがきを冒頭に配した。今回、翻訳・紹介した上記の(1)～(5)のうち、(2)～(5)までの散文4篇は、(5)「母のバス・パフォーマンス」を除いて、すべてこの散文集『女の白夜』所収の第1部の作品である。なお、(5)は、『女の白夜』出版後に執筆されたため、『女の白夜』には収録されていないが、その後、鉄凝の散文集として編集・出版された『鉄凝人生小品』（99年10月、花山文芸出版社）の章立てから類推して、やはり『女の白夜』の第1部に属する作品と考えられる。ちなみに、『女の白夜』の第1部（第一輯）、2,3,4部は、それぞれ『鉄凝人生小品』の「第一輯」、三、二、四に、ほぼ対応している。「母のバス・パフォーマンス」は、『白夜』『人生』ともに「第一輯」に収録されている。したがって、上記散文(2)～(5)は、鉄凝の「代表作」である。(2)と(4)は、ともに北京の外祖母の住む屋敷及び横丁の思い出を綴ったものである。(4)は少女時代のまっすぐな心が、大人に踏み躪られた悔しさを丹念に描いており、(2)は文革体験の悲劇を崔先生・崔夫人の発狂によって鋭く抉った作品である。(3)と(5)は、文革時代をくぐりぬけ生きてきた父と母のそれぞれの生活の姿を、娘の目からみた作品で、それぞれの個性を的確に捉えた秀作である。彼女の父が、文革時期に必死でパン作りに熱狂したとは、また、彼女の母があんなにもバス乗りの達人であったとは、意外でもあり、さもありませんとも思われる。この作品からも、本当に中国の歴史を生きてきた人の姿を、その力強さを、抵抗のありようを知ることができる。

(2)の崔先生・崔夫人は、短篇小説「私刑」の主人公たちのモデルである。鉄凝自身の少女時代の北京・横丁体験を綴った(4)は、もちろん全く同じ描写ではないが、中篇「永遠有多遠」や長編「玫瑰門」「大浴女」などに女主人公の少女時代の原体験と重なる。

なお、これまでに池澤が翻訳・紹介したことのある鉄凝散文作品は、以下のとおりである。96年版『女人的白夜』の第四輯〔外国体験〕に収録された③は、99年10月『鉄凝人生小品』の第四輯〔外国体験〕へではなく第一輯へ、また、⑤は第三輯〔人物コラム〕から第一輯へ、⑥は第五輯〔自伝的散文〕から第一輯へと、それぞれ変更されている。

- ① 「草の指輪」（原題「草戒指」，原載『当代』90年6期）
『福島大学地域研究』3巻2号（91年10月）所収。
- ② 「空の友達」（原題「空中朋友」，原載不明）
『行政社会論集』7巻2・3号（95年2月）所収。
- ③ 「女の白夜」（原題「女人的白夜」，原載不明）
『行政社会論集』7巻2・3号（95年2月）所収。
- ④ 「オスロでのトマト餃子パーティー」（原題「我在奥斯陸包饺子」，原載不明）
『行政社会論集』7巻2・3号（95年2月）所収。
- ⑤ 「『四十一番目の男』の夢」（原題「《第四十一》夢」，原載不明）
『商学論集』65巻1号（96年8月）掲載の「棉積み（三）」訳注（1）所収。
- ⑥ 「真実の作為的歲月」（原題「真摯的做作歲月」，原載『小説家』90年1期）
『商学論集』66巻1号（97年10月）所収。